遺族の私が思う被害者サポート

Ｋ・Ｙ

２０００年（平成１２年）７月に飲酒運転による交通事故で、私は当時４歳だった娘を亡くしました。娘の死から１５年経った今、講演や相談を聞くことなど、様々な事件・事故の被害者とご遺族をサポートする活動に携わっています。

娘を亡くした当時、事故直後の悲しみや怒り・戸惑いといった被害者の想いを聞いてくれる相談窓口もサポート体制も私の身近にはありませんでした。

反対に周囲からの誹謗・中傷といった二次被害をいろいろな形で受けましたし、今でもまだ受ける時があります。

長く活動していると「なぜ、被害者やご遺族の相談や講演などをされるようになったのですか？」とよく聞かれますが、それは私が娘の死から辛く暗い時間を過ごし、『経験者でなければ共有することが出来ない想い』を感じるからでしょうか。ご遺族等のお話を伺ったり、自身の経験を話しているうちに、いつのまにか講演や相談等の依頼が舞い込むようになり、同じような想いを持った県内の方々が集まることができる自助グループも設立しました。

私は活動を通して、私の被害者遺族としての悲しみをお伝えしたいのではありません。遺族の声を通して、今苦しんでいる被害者やその御遺族に寄り添う気持ちを皆さんに持って頂きたいという想いと、まだまだ何も言えず、うずくまっている当事者が多くいるからです。

娘の死後、私は同じ様に大切な人を亡くした人と話がしたい、被害を受けた当事者やご遺族の方がどんな想いで生きておられるのか知りたいと思っていました。

そんな悔しく、寂しい日々を過ごし、同じ想いの人が近くにいないか探していたとき、「遺された親たち」という１冊の本から『全国交通事故遺族の会』を知ることが出来ました。この会を通じてたくさんの同じ想いをした方たちと出会い、癒され励まされ、少しずつですが事故以前に近い生活を取り戻すことができました。ですが、娘の声は聞けず成長は見れませんし、事故以前と同じような生活には戻りません。

それでも、娘を失い、周囲の心ない態度にボロボロになっていた私の心が、人からの支えによって救われたように、人によって傷付けられた心の傷は、人の力によって癒され、治っていくのです。

皆さんには、なりたい姿を描き、自ら趣味や進路、職業を選択した経験があると思います。

しかし、私や私と同じ経験をした人は、自ら希望して交通犯罪等の被害者や遺族になった訳ではありません。

もしも、自分の周りに深い悲しみを抱え、動けなくなっている人がいたら、あなたの言葉と心、行動であたたかくその方に寄り添って頂けませんか？

それだけのことで、心に傷を負った人は、少しずつ笑顔を取り戻し、前を向いて現実を見つめ、歩んで行けるようになるのです。

どこにでもいる母親の今の私は、悲しい体験での出会いがきっかけとな

ってできたご縁から、『生命（いのち）のメッセージ展』を全国の参加家族たちと共に活動し、広報、啓発などをしています。

　また、自助グループでは、当事者と経験はなくとも辛い悲しみを十分に理解し、共に抱え、共感してくれる仲間たちと一緒に相談を受けたり、心のサポートを行う活動をしています。

　しかし、この活動は広げるのではなく、無くなってくれることが目標です。

　被害者や遺族が同じ立場の方に相談したり、声をあげることが少なくなることは、地域での思いやりや、行政が被害者と一緒に問題解決をしていくなど、被害者を支える仕組みがしっかり構築されたということですから、私の活動が小さくなり無くなることを実現出来たならば嬉しいことです。誰もが人の痛みがわかる、そんな社会になってほしいと思っています。

　交通事故でも飲酒・ひき逃げ・無免許・無保険などは、自分の心がけで無くせる事故です。人が人を傷付けることがなく、被害者にも加害者にもならない、安全で安心して暮らせる社会であることを切に願っています。